◇　国　語

国２－１～国２－18まで18ページあります。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

みなさんは「廃墟（はいきょ）」という言葉から何をイメージするでしょうか？

この言葉からは、あるいは廃墟そのものからは、おそらく何もないところ（空虚、空白、無意味）、過ぎ去ったもの（過去、痕跡）、現世において価値あるとされるもののはかなさ（虚栄＝ヴァニタス）、時間の流れ（歴史、記憶）、隠されたものや埋もれたもの（資源、遺産）、これからの自分たちの姿（未来、終末）、かつての自分たち自身（同一性と他者性）などといった、さまざまなことがらが入り混じって呼び起こされるのではないかと思います。

ご存じのように、ヨーロッパの伝統ある都市の多くが廃墟と［　ア　］しています。たとえば、ローマのフォロ・ロマーノなどがよく知られています。

こうした廃墟は、A コウガイや田園にあって再開発が遅れてそのまま放置され、いわば時代に取り残されて現在にいたっているというわけでは決してありません。そこでは(二)廃墟は、廃墟として廃墟のままに、ずっと維持されてきました。それはその都市が廃墟を廃墟として維持してきたことの歴史、痕跡、記憶をとどめる場所なのです。

廃墟は現代では時には観光資源となることもあるかもしれませんが、近代以前においては経済活動には加わっていたとは思えません。廃墟を撤去し更地にして新しい商業施設や集合住宅にでも置き換えた方が、短期的な経済効果は高いでしょう。なるほどかつての廃墟のある部分は新しい建築物によって置き換えられてきたのかもしれませんが、ある部分は廃墟として維持されてきたのです。

このように廃墟は一見したところでは無意味で空虚な場所なのですが、とはいえそれを取り去ってしまうと、都市をはじめとする共同体というものの全体が意味や価値を失ってしまう怖れがあることに、われわれの先人たちは気づいていたのです。彼らは、目先の利害のために自分たちの内部にある時間差をともなう異質な要素をすべて排除して、都市の全体を時間的に(a)均質化してしまうことが含みもつ重大な危険性がわかっていたのでしょう。

ところでイタリアの美術史家であるサルヴァトーレ・セッティスは最近の著書の中で、廃墟はヨーロッパ文明においてつねに「古典的なるもの」を体現してきたと述べています。それでは「古典」と「古典的なるもの」の違いはどこにあるのでしょうか。その違いは、古代ギリシアのような古典古代においても「古典的なるもの」が志向されてきたという事実によく表れています。古典は古典としてそれだけで自己完結しているわけではなく、古典とされるもの自身の内部にも、それ自身とは異なる「古典的なるもの」への志向性やキョウシュウ[B]が組み入れられているのです。

セッティスは以下のように述べています。

「近代人が、古代人の著作の行間に、古代人にはなかったはずの『古典的なるもの』という用語を読みとることができるのは真実であり、またある意味では正当である。なぜならば、古代人にとっての古代そのものが、明確に示された過去へのキョウシュウを媒介にして現在の価値を確認・判断しようとする強い衝動を含んでいたからであり、それゆえそこではすでに『われわれの』古代についてのイメージすべて、われわれの『古典主義』すべてがシサ[C]されていた、いやむしろ創造されていたからである。」

廃墟というものは、自分たちの内部にあって自分たちの一部ではあるけれども、時間差によって自分たちと異なるものを発見したり気づいたりするようにうながす契機となってきました。さらにこのような自分たち自身の内部における他者の発見と尊重は、自分たちの外部にあって自分たちと同じものの発見、すなわち［　イ　］の理解へと駆り立てる契機ともなってきたのです。

セッティスによれば、廃墟は、不在と存在を同時に示しており、見えるものと見えないものの交差点であって、はるか昔にそれらを創造した人々の記憶、その後破壊し、放置し、掠奪（りゃくだつ）した人々の記憶、そしてそこに現代的意味を与えようとした人々の(二)記憶が重層する場所なのです。

大学とは何かという問いに対して、こうした廃墟のようなものだという理解も可能なのではないでしょうか。(三)趣味の悪い比較だと感じる方もおられるかもしれません。もちろんこれまでの議論の流れからもおわかりのように、ここでの廃墟とはネガティブなものではありません。

このような大学の理解のあり方を提起するにあたって、わたしのネントウ(D)にあるのは、ビル・レディングズによる『廃墟のなかの大学』という著書です。レディングズは大学を「卓越性（エクセレンス）」という経営的な基準で評価することに対して鋭い批判を行っています。彼によればこのような個別性を著しく(b)欠いていて何にでも適用可能な基準は、消費者中心の官僚的企業体にこそ似つかわしいもので大学にはまったくふさわしくありません。

さてレディングズが大学を廃墟のようなものだと喩えるときには、上述のようにヨーロッパの都市空間においてずっと維持されてきた廃墟のイメージを踏まえています。この意味で大学の価値は、現代社会の知的な側面の中に「時間差」を導入することにあります。現代社会における一種の「廃墟」として、時間差を許容する特別な空間である大学の存在意義に、わたしは着目したいと思います。

それではなぜ大学の価値について語るとき、時間差が重要となるのでしょうか。

この問いに答えるためには、まず、大学という場がこれまでに獲得された知識そのものの集積と等価ではないことを理解する必要があります。つまり大学という場に価値を付与するものとして、今現在の瞬間的な知識の量だけが重要なのではないということです。

むしろ大学とは(四)知識への志向性を継承する場であって、未来に向けた［　ウ　］可能性を保持し続けることが重要なのです。大学における教育で継承されるものが情報ではなく知識への志向性だからこそ、限られた時間の教育によって継承することができるように思います。もちろんだからといって、知識の集積に意味がないわけではありません。教育や研究のために、できるだけ多くの情報を一定の場所に集めておき、いつでも利用できる学術情報のキバン(E)を整備することも不可欠です。

大学に在学中に、それぞれの学問分野の基礎的知識だけでなく、俯瞰的（ふかんてき）な知識についてもある程度は身につけておくべきでしょう。とはいえ、教養教育に割り振られた時間的な枠のなかでそれを行うことは現実的には非常にむずかしい、というよりも不可能と言ってよいでしょう。このような知識の獲得だけをめざすのでしたら、かならずしも大学という場でなくてもできます。もちろん大学においても科目によっては、知識の獲得そのものが重視されることもあります。ですが、より大切なのは、知識へ

の志向性を自分のものとすることです。この志向性に目覚めた者は、その後社会に出てひとりでも引き続き成長していくことができるからです。

では知識への志向性とは何でしょうか。ここで、すでに獲得された知識であっても、それがその本来の意味を開示するのは、時間の流れにおいてだということを思い起こしていただきたいと思います。みなさんには、学生時代に先生が授業で語った言葉や本を通じて学んで、ひととおりわかったつもりになっていた知識の意味するところが、後になって「そういうことだったのか」と、あらためてはっきりと見えてくるような経験はないでしょうか。

大学において、学生たちがそれぞれの年齢や、もっている知識量に応じて１００パーセント理解できることだけを学ぶことがめざされるようになってしまったら、もはや大学とは呼べないものになってしまいます。いまの自分には見えてはいないが、時の経過とともにしだいに姿をあらわにして、視界に入ってくる世界が彼方に広がっていることに気づくことが、何よりも大切なのです。

（木俣元一「『廃墟』としての人文学―ヨーロッパの文学部より―」による）

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　コウガイ

1
①彼女の意見をコウテイする　②彼はコウガンムチな人物だ
③民衆は激しくテイコウした　④大阪のキンコウの家を買う
⑤なんとコウダイな海だろう

B　キョウシュウ

2
①大雨で橋が壊れたためにシュウチクした
②一人海辺を歩くとリョシュウを感じた
③婚礼はかつてシュウゲンと呼ばれていた
④あの二人のペアはゴエツドウシュウだ
⑤刑事のシュウネンが実り事件が解決した

C　シサ

3
①知人に犯罪をキョウサする　②経営する工場をヘイサする
③各国のササツを受け入れる　④課長をホサする役目を負う
⑤キッサ店でゆっくり休む

D　ネントウ

4
①物理学の重要なガイネンを理解する
②この中古の車はネンピがよくない
③この川ではテンネンの鮎（あゆ）がとれる
④テープがネンチャクして取れない
⑤村のネンチュウギョウジを記録する

E　キバン

①父親のサイバンの行方が気にかかる
②俳優が舞台をコウバンした
③オルガンはケンバン楽器だ
④バンジがうまくいくといい
⑤負傷したランナーのバンソウをする

5

問二　空欄［ア］・［イ］・［ウ］に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

［ア］
①交流　②相殺　③乖離（かいり）　④断続　⑤共存

6

［イ］
①固有性　②他者性　③希少性　④偶然性　⑤必然性

7

［ウ］
①遡及的　②潜在的　③主観的　④必然的　⑤情熱的

8

問三　傍線部（a）・（b）の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

（a）均質化

9

①複数のもののなかにある異質な要素を認めて尊重すること
②複数のものの長所がだんだんと発揮されていくこと
③複数のものの特徴がはじめから互いに似ているということ
④複数のものが同じような状態に調整されていくこと
⑤複数のものを比較することでそれぞれの価値を定めること

（b）著しく（著しい）

10

①はっきりと明確であること
②その場にふさわしくないこと
③不自然に目立っていること
④よく見るとそうであること
⑤物足りない状態にあること

問四　傍線部（一）「廃墟は、廃墟として廃墟のままに、ずっと維持されてきました」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

11

①廃墟は、外国から観光客を呼び込むための観光資源としても有用だと古代から考えられていたから
②人々は、廃墟をわざわざ撤去したり更地にすることで発生する費用や時間を無駄と思っていたから
③誰にも利益をもたらさず、かといって無益とも言い切れない廃墟に人々は関心を持たなかったから
④過去の痕跡や記憶を留める廃墟は、共同体に意味や価値を与える役目を持つと認識されていたから

問五　傍線部（二）「人々の記憶が重層する場所」とあるが、具体的にはどのような場所か。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

①破壊されたり掠奪（りゃくだつ）されたりした負の記憶ばかりが思い起こされる場所ということ
②ヨーロッパの人々の思想や理想、あこがれが自ずから現れている場所ということ
③これまでに廃墟に関わってきた人びとの行動や思想がうかがえる場所ということ
④まるで大学のように、人々の学問への情熱や好奇心をかきたてる場所ということ

問六　傍線部（三）「趣味の悪い比較」とあるが、なぜ趣味が悪いのか。その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

①廃墟と大学とを比較するときには、もう少し厳密に学術的な手続きをふまえる必要があるから
②大学のなかには新設して間もないものもあり、古い廃墟と比較することは馬鹿げているから
③一般的にネガティブなイメージで語られる廃墟を大学と比較するのは穏当と言えないから
④廃墟が点在するヨーロッパならまだしも、日本の大学を廃墟と比較することは意味がないから

問七　傍線部（四）「知識への志向性」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

14

①それぞれの学問分野だけでなくそれを越えて広範囲の知識を集めようとする意欲のこと
②たとえ今はわからないことでも知識を身につけるべく努める主体の意識の持ち方のこと
③大学が教育や研究のために、書籍をはじめとする多くの知識を集積していく過程のこと
④すでに自分が持っている情報の正しさを裏付けてくれる証拠を探求していく営みのこと

問八　本文の内容と一致するものはどれか。次の①～④の中から一つ選べ。

15

①現代社会において「時間差」を体現する存在として大学の持つ意義が説明されている。
②廃墟を尊重する西欧の伝統ある都市に対して日本の都市政策の遅れが指摘されている。
③レディングズは著書で大学をその個別性において評価することを厳しく批判している。
④無意味かつ空虚な場所であるという廃墟が持つネガティブなイメージに賛同している。

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

子どもと大人では、その［い］家族観に根本的なちがいがあることには気づいていた。けれどその相違をこれまで言葉にできずにいた。ところが東日本大震災の起きた二〇一一年、いわゆる3・11以降、そのぼんやりとしていた両者の家族観のちがいが自分の中でかなりくっきりしてきた感じがするのだ。それを言葉にしてみれば、こうなる。

子どもはその誕生後に一定期間、ほかならぬ自分という存在を、心と体を差し出し、まるごと受けとめてくれる特定の特別な誰かを必須としている。そのような受けとめ手なくして、自分といういのちの［ア］な存続はおぼつかないことを、ほかならぬそのいのちのレベルにおいて知っている。したがって子どもは、自分を受けとめてくれる存在を求める。自分が受けとめられているのだという感覚、それを「受けとめられ体験」と呼べば、そのような受けとめられ体験を提供してくれる受けとめ手を、まっさきに自分の愛着の対象とする。そうした最初の愛着の対象が子どもにとって「原初の家族」といってもいいかもしれない。このことは［ろ］、そのような家族がいる環境を、子どもはそうした言葉は使わないけれど、［イ］な意味で「家庭」とみなしているということを告げている。いうまでもなく、子どもがのぞむ最良の受けとめ手が母親であり、父親がそれに続くのである。

ここには二つの特徴がみとめられる。一つは子どもの家族観には血縁意識が関与していないということである。子どものかんがえる家庭のA[カクシン]にあるのは、自分を受けとめてくれる受けとめ手であり、その受けとめ手と一緒にいるという感覚である。

このことと関連して二つ目の特徴がえがきだせる。それは、子どもは受けとめ手が一緒にいること以外になにももとめないということ。ややていねいに述べれば、子どもは自分だけを受けとめてくれる特定の「誰か」をいのちの存続の必須の条件としている。したがって、その必須の「誰かが一緒にいること」が最重要なのである。自分のいのちの存続のための受けとめ手が「一緒にいること」自体が子どもにとっての家庭であり、我が家なのである。ということは、我が家という外形＝実空間（家屋）の有無は子どもにとって二義的な意味しかもたないであろうことをシサしている。

これに対して、大人の家族観は、子どもに欠けている右の二つの要素、血縁と実体としての我が家が基礎になっている。大人にとって家族とは血縁の関係であり、血縁において他と区別される関係である。その血縁関係がつくる家庭は、他の家庭と実質を異にする我が家という実空間において成立する世界のことである。

繰り返すけれど、子どもはそのようには感じていないように思える。

例をだして説明してみよう。小さな家出を繰り返す子どもは、家に居場所をみいだせない、だから家に帰りたくないと訴える。「居場所がない」と子どもがいうとき、そこに受けとめる力がはたらいていないことを物語っている。受けとめる力がはたらいていないということは、そこに受けとめ手がいないということである。どんなに豪華な建物をたて、立派な内装で部屋をしつらえようと、受けとめ手がいなければ、子どもにとって、そこはクウドウ(B)と同じである。そのような場所で自分の存在、自分のいのちの安心を感じることができない。逆に、はたからみてどれほど貧しく粗末なすまいとみなされようと、そこに受けとめ手がいるなら、子どもはそれを貧しいとも粗末とも感じることはないだろう。

子どもにとって家庭は、そのような自分だけの受けとめ手が［　ウ　］に存在する場を意味している。だから、子どもはそこが一時的に身を寄せているだけの避難所であろうと、仮設住宅であろうと、受けとめ手が一緒であれば、安心を得られる、それゆえに耐えることができる。家屋という実空間はしたがって子どもにとって、第一義的に重要ではないのだ。

他方、大人は、たとえば避難所暮らし、仮設住宅暮らしに家庭という感覚を抱くことはできない。家族が一緒に暮らせても、そこは家ではない。大人は暮らしの定着場所とするにふさわしい家屋のあるところ、他者の目をシャダン(C)でき、家族である自分たちだけがまとまって一つになれる、固有の親和性の浸透した実空間を切実に必要としている。遠慮なくその親和性にもぐりこみ、ひたり、それとたわむれることのできる、独立性のある場所を求めようとする。

住居という形式でもって土地・空間を占有することと、その住居にともにすんでいる人たちを自分の家族であるとみなす感覚が一つになっている。これがなくては、せっかく築いた家族の絆がばらばらになってしまう、我が家と呼ばれる住居はそのような同一性をなりたたせる不可欠な要素なのである。したがって避難所のようなところは［　は　］場所ではあっても、我が家

ではない。仮設住宅もおなじだ。同一性の感覚を得られないのは、もともと避難所や仮設住宅が被災者に一時的に提供されたものでしかないという理由もあるだろう。しかし、それ以上に強くはたらいているのは、そこがたとえ仮のすみかであろうと、みずから我が家としてえらんだ、それなりに［に］実空間でなければ、自分の家庭観が完結しないという意識であるように思えるのである。はやくこの一時しのぎの場所を出て、我が家にもどりたい、我が家の再興をめざしたいという発想においたてられるのはそのゆえであると考えられる。

（中略）

いわゆる3・11以降、二つの大きな不安感情に揺さぶられ続けてきた。いまもそれらにつきまとわれていることに変りはない。二つとは、「はかなさ」と「よるべなさ」という言葉で表される。どちらも喪失という事態に直面したときの無力感がもたらす、それぞれ異なる心的状態を示そうとしている。

このうちのはかなさは、私たちにとってなじみのある感情である。むろんはかなさは日本人独自の感情ではない。文字表現の［エ］な先進国である中国の人にとって、紀元前にこの感情はすでに詩の主題であったのだ。

はかなさには、ともに経験的なものであるけれど、現れかたの異なる二つの喪失に対する感情がかかわっている。第一は［オ］なもので、たとえばきれいな花や幼いいのちを前にしたときなどに自然ともよおす、いつまでこの盛りが続くのだろうといった、不安なこころの動きである。あらゆる生きとし生けるものを前にしたときに現れる感情だといってもいいかもしれない。さぐってゆくと、区切りがはっきりしない、定まりがないという意味をもとに、たよりないということ、うつろいやすいということ、ひいては生きとし生けるものはみないつかは死ぬといった無常観にゆきつくことがわかる。

（中略）

第二は、おなじ喪失にたいする感情でも、ジンイ[D]をこえた力がはたらいたことの結果を前にしたときに現れる内的状態である。人びとは少なからず自然災害、火災、飢饉、疫病、人事、乱世、遷都といった激動する現実にふりまわされた経験をもっている。そのようなときに訪れる感情は、一寸先になにが待ち受けているのかわからない、人間のいとなみなど、まるで大きな力でうご

く川のながれに浮かんできては消えるあぶくのようなものだ、という比喩にあたるものであるだろう。

（中略）

演劇人を目指す若い人たちと3・11ショックについて話し合う機会をもったとき、彼らは［　ほ　］に当たり前すなわちケンゴなものとして現前していると信じていたものがじつは少しも当たり前ではなかったのだという現実を突きつけられた驚きと怖れを口にしたあと、多くが「だからこそ、自分に与えられた一日、一日を大切に生きよう」という決意を語ったのである。

はかなさは、「生きられる感情」ということになるだろう。はかなさにおいて、再興がはじまるのである。だとすれば、私は自分の内なるはかなさの感情をいのちの存続を旨とする家族感情を破壊するものとしておそれる必要はないだろう。

（芹沢俊介『家族という意志――よるべなき時代を生きる』による）

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　カクシン

①規模をカクジュウする　②カクカゾクが増加する
③カクヤスの物件　④カクゼンとした事実
⑤文明からカクゼツされた地

16

B　クウドウ

①ドウシンに返る　②ドウギ的な責任
③寺のドウウを改修する　④犯人にインドウを渡す
⑤すぐれたドウサツ力

17

C　シャダン

①カーテンでシャコウする　②シャイを伝える
③熱湯でシャフツする　④シャコウシンを煽る
⑤シャサイを発行する

18

D　ジンイ

①復興にジンリョクする　②ジンリンに背く行為
③ジンダイな被害　④ジンヨウを整える
⑤被疑者をジンモンする

19

E　ケンゴ

①ケンアクな関係　②宝石をケンマする
③ケンジツな経営　④薬物をケンシュツする
⑤校長にケンゲンする

20

問二　空欄［ア］・［イ］・［ウ］・［エ］・［オ］に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

［ア］

①一時的　②科学的　③安定的　④人工的　⑤妥協的

［イ］

①打算的　②本質的　③神秘的　④発展的　⑤倫理的

［ウ］

①永続的　②歴史的　③優先的　④表面的　⑤多角的

［エ］

①多面的　②電撃的　③伝説的　④暫定的　⑤圧倒的

［オ］

①基本的　②効率的　③求心的　④予期的　⑤調和的

［21］［22］［23］［24］［25］

問三　空欄 い ・ ろ ・ は ・ に ・ ほ に入る最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

い
①拠りどころのない　②よる辺のない
③拠ってたつ　④よんどころない

ろ
①とりとめもなく　②とりもなおさず
③とりあえず　④とりいそぎ

は
①雨だれ石をうがつ　②雨晴れて笠を忘れる
③雨降って地固まる　④雨露をしのげる

に
①意にかなった　②意に感じた
③意に反した　④意表を突いた

ほ
①一朝一夕　②異口同音
③同工異曲　④朝三暮四

26　27　28　29　30

問四　本文の内容と主旨が異なるものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。　31 ・ 32

①子どもが脅えるのは、自分のそばから受けとめ手がいなくなることであり、受けとめ手との間の絆をうしなうことである。

②家出を繰り返す子どもは、自分と親との間に血縁関係がほんとうにあるかどうかを疑っているからである。

③家族観をめぐって大人と子どもには大きな相違がある。子どもが重要視しないのは血縁関係である。

④大人が避難所や仮設住宅で家族一緒であっても落ち着かないのはそこに固有の親和性を感じることができないからである。

⑤「はかなさ」は日本人固有の感情であり、古くから多くの詩歌の主題となってきた。

⑥「はかなさ」とは、不安なこころの動きであり、生きとし生けるものを前にしたときに現れる感情である。一方で「はかなさ」ゆえに人は再興に向けて立ち上がることができるのである。